

うものであって、その規範や構造にのっかって、このように行動することが求められていることであり、その求めにうまく応えられないときには、例えば、受容的なアプローチをした方がいい、というふうに考えます。

こうした二つの議論の違いは、根本的には問題ではないのですが、私の中では、二つの議論の仕方がまだきちんと結び付いていないというのが、正直なところでは。

話題提供3

「社会参加の学習ユニットからの提案—シティズンシップ（市民性）教育の視点から—」

小玉 重夫

（学校教育高度化センター長・基礎教育学コース）

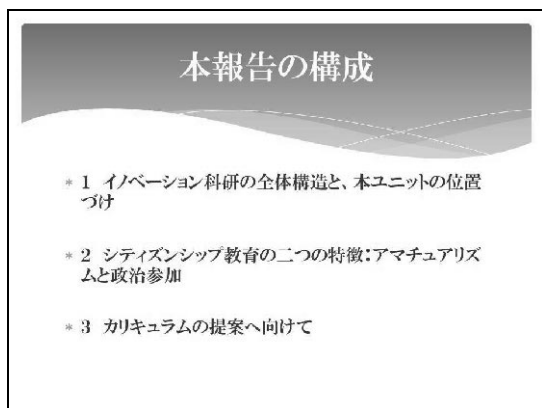


図1

本日は、私がこの共同研究全体の代表者であることから、最初にイノベーション科研の全体構造についてあらためてご説明し、その上で私の担当する社会参加の学習ユニットの位置付けについてご説明します。その後、中でも私が個別に担当しているシティズンシップ教育について二つの特徴を申し上げて、最後にカリキュラムの提案へ向けてということでお話ししたいと思います(図1)。

1.イノベーション科研の全体構造と、本ユニットの位置付け

1-1.研究の理念

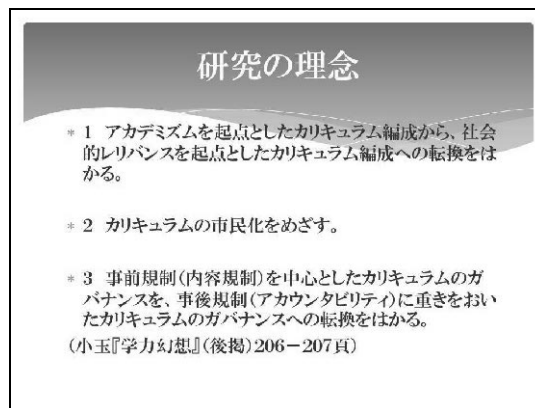


図2

共同研究全体の構造と本ユニットの位置付けについてお話しする前に、まずは私たちの研究を進めていく上での考え方についてあらためてご説明します。ポイントは三つあります(図2)

一つは、アカデミズムを起点としたカリキュラム編成から、社会的レリバンスを起点としたカリキュラム編成への転換を図ることです。今までの学習指導要領は、たとえば日本学術会議の中に教科内容を考える部会があり、あるいは教科内容の関連学会が存在し、それらが中心となってカリキュラムの内容が考えられ、それが下に降りてくるという構造でした。そうした従来のカリキュラム編成の仕組みを、もう少し社会との関係を意識したものに転換できないかということです。これは、先ほどからの報告で「社会に生きる」と言われてきたこととも関係します。社会に生きるとは、もちろん実際に社会に出たときに役立つという意味もありますが、それ以上にもっと深い意味もあると思います。学校は、子どもたちが社会を生きていく上でふと立ち止まって思考をする際に、深い視点を提供し得るような題材を提供することができるのではないかと考えています。

そのために、二つ目のポイントとしてカリキュラムの市民化ということを考えています。これについては後ほど詳しくご説明します。

三つ目のポイントは、事前規制(内容規制)を中心としたカリキュラムのガバナンスから、事後規制(ア

カウンタビリティ)に重きを置いたカリキュラムのガバナンスへの転換を図ることで。今までは、教えるべき内容が学習指導要領の中で決められており、それが単元や教科書という形で構成されて、学校現場に降りてきていました。教員はそれに基づいて指導案を作り、授業をして、子どもたちはそれを学ぶというシーケンスが前提となっていました。これに対して、私たちが提案する新しい学習についての考え方を実行に移すには、学校現場や教師自身がカリキュラムや授業をつくる、その裁量の余地を拡大していくことが求められます。

その際に、カリキュラムの公共的な質をどこでチェックし保証するかということですが、あらかじめ学習指導要領で細かく内容を規制するのではなく、学校教育で教えたことのアウトプット(結果)を事後的にチェックするという方法に変えていくことがあり得ると思います。実際に、総合的な学習の時間がカリキュラムに導入されて以降、こうした評価が進められてきています。それをカリキュラム全体に広げていくことを問題意識として持っています。

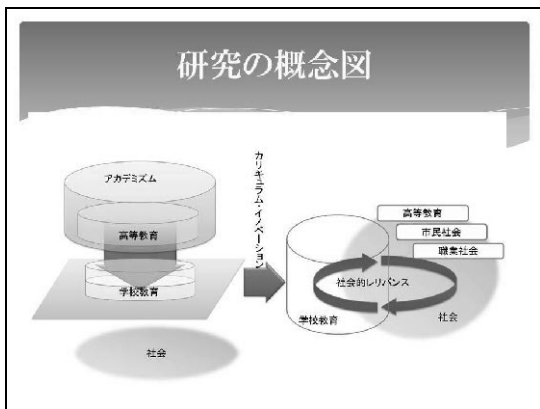


図3

図3は、今の話を概念的に表したものです。アカデミズムを起点とした今までのカリキュラムから、カリキュラム・イノベーションにより、私たちが考える社会に生きる学力形成を目指すカリキュラムを作ることになります。

1-2.研究の組織

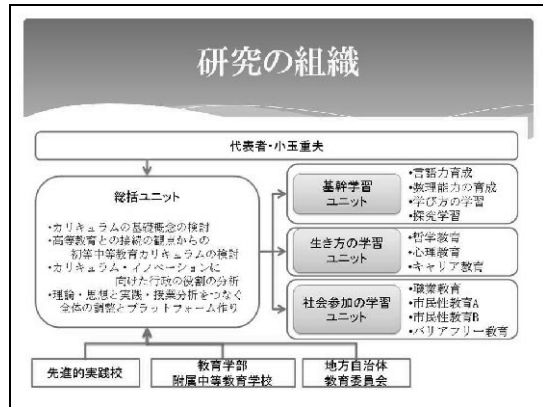


図4

そのための研究組織として三つのユニットと総括ユニットを立ち上げ、3年間研究を続けてきました。市川先生のお話が、一つ目の基幹学習ユニットに相当します。既存の教科の枠組みを前提として、そこで何ができるのかということを中心に研究を進めているユニットです。二つ目の生き方の学習ユニットが田中先生の報告してくださったところで、新たに付け加えた方がいいと思われる教育内容を中心に、哲学・心理・キャリア教育について研究を進めています。それから、私がお話しているのが三つ目の社会参加の学習ユニットです。

そして、村石先生から後ほどご報告いただくのが総括ユニットです。この研究を進めるに当たり、東大の教育学部附属中等教育学校のほぼ全員の先生方にご参加いただき、協働でプロジェクトを組んで実施してきました。それを大学教員の研究とつなぐプラットフォームとして、この総括ユニットを設けています。

1-3.社会参加の学習ユニットの概要

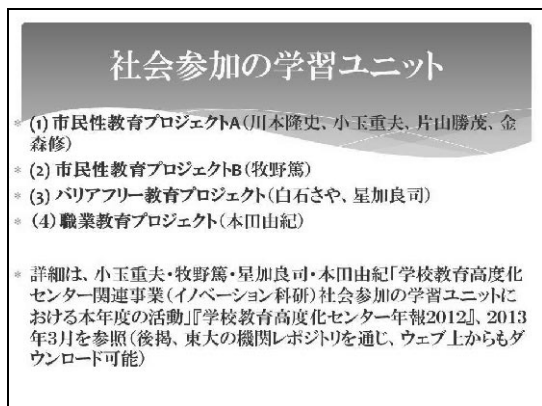


図5

私がリーダーを務める社会参加の学習ユニットは、四つのプロジェクトで構成されています。「市民性教育プロジェクト A」「市民性教育プロジェクト B」「バリアフリー教育プロジェクト」「職業教育プロジェクト」の四つで、昨年度の成果については配付資料をご覧ください(2012年度 学校教育高度化センター年報 64～65 ページ参照)。

「市民性教育プロジェクト A」は、私や川本隆史先生、片山勝茂先生、金森修先生で実施しています。

「市民性教育プロジェクト B」は牧野篤先生が担当されているプロジェクトで、主に社会教育をベースに地域社会との交流を重視しながら、他者とともにあることでもたらされる利他性と近接性をテーマに研究を進めています。

「バリアフリー教育プロジェクト」は、白石さや先生と星加良司先生を中心に進めており、さまざまなマイノリティを包摂した共生社会を生きる力を涵養するための学習を中等教育のカリキュラムに効果的に導入することを目指しています。カリキュラム案としては、総合学習を一つの中心としながら、教科の実践につなげて行うバリアフリー教育が提案されています。

最後が「職業教育プロジェクト」です。本田由紀先生が中心になって展開されているプロジェクトで、昨年のシンポジウムでは詳細にご紹介いただきました。「仕事のリアル」と題して、金融教育と労働法教育の授業をそれぞれの専門家に担当していただいています。ここでのカリキュラム案は、本田先生の「職業

教育プロジェクト」と、田中先生のお話にあった高橋先生の「ライフキャリア教育プログラム」が一緒になったものです。職業生活にどう適応するのかということと同時に、実際に適応できなかった場合にどう考えるのか、中1から高3に上がるにつれて、特にこの抵抗という形で対処できるようなカリキュラムの実現が提案されています。

2.シティズンシップ教育の二つの特徴:アマチュアリズムと政治参加

2-1.シティズンシップ(市民性)とは何か

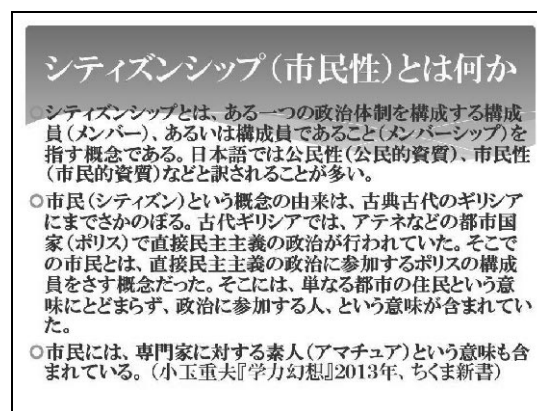


図6

ここからは、私が担当しているシティズンシップ教育についてご説明します。まず、シティズン(市民)という言葉には、二つの意味があると思います(図6)。一つは「政治に参加する人」という意味です。そしてもう一つは、例えば「市民ランナー」の「市民」はプロではないという意味で使われているように、「アマチュア」という意味を持っています。その両方が合わさって市民性教育の理念を形づくっていると考えています。

2-2.不確実な問題、分からない問題(the issue of uncertainty and ignorance)についての判断と意思決定

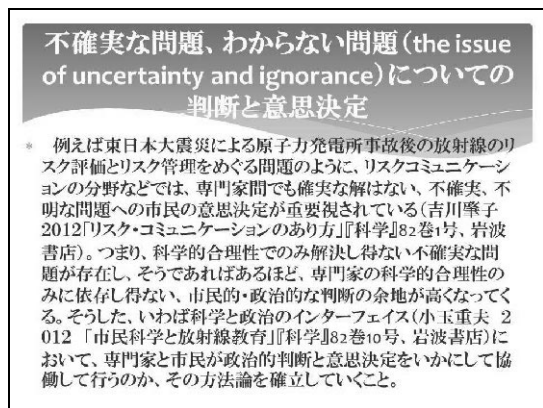


図7

現在、市民性教育の分野で問題になっていることは、全ての教科においても問われています(図7)。例えば、原発事故後の放射線のリスク評価・管理の問題については、リスクコミュニケーションの領域において専門家間にも確実な解がない、不確実で不明な問題(the issue of uncertainty and ignorance)であるといわれています。つまり、科学的合理性のみでは解決し得ない不確実な問題が存在し、そうであればあるほど、専門家や科学者の知見をどう評価するかということ、われわれ市民が市民的・政治的に判断することの重要性が高まってきているのです。そうした、いわば科学と政治の境界線(インターフェース)において専門家と市民が共同で判断し、意思決定を行っていくことは、いかにして可能なのか、その方法論が問われています。それとの関係で、学校教育において市民を形成していくことは重要な課題であるとされています。

2-3.無知な市民

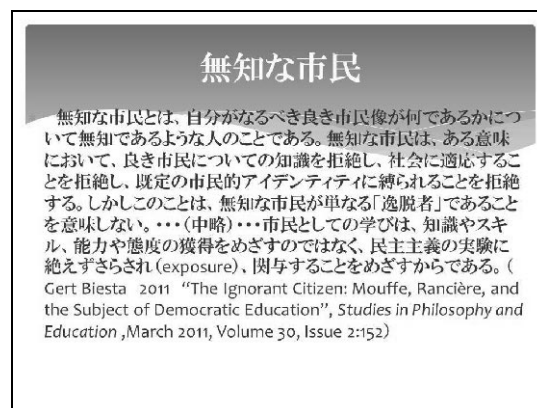


図8

ルクセンブルグの教育哲学者であるGert Biestaは、このシティズンシップ教育に関して「無知な市民」という論文を書いています。Biestaによると、無知な市民とは、自分になるべき市民像が何であるかについて無知である人のことです。無知な市民は、ある意味で社会に適応することを拒絶する、つまり、あらかじめ決められた市民的アイデンティティに縛られることを拒絶しますが、だからといって、無知な市民は単なる社会からの「逸脱者」ではないということです。では、市民としての学びはどのように形成されるかというと、単に知識やスキル、能力や態度の獲得を目指すのではなく、民主主義の実験にさらされ、そこに参与して初めて市民は市民になると言っています。

これを市川先生の話に引きつけて言うと、今までの学校での学びは、積み木のように基礎から応用へ、あるいは習得から探究へと積み上げていくものでした。それに対して、無知な市民をベースにした市民性教育は、出来上がった積み木を崩してみるので。原発の問題は、私たちの社会の中で今まで積み上げられてきたものが一回崩され、そこで何が組み立て直されるのかということがまさに問われている非常に典型的な例だと思います。

2-4.学力の市民化

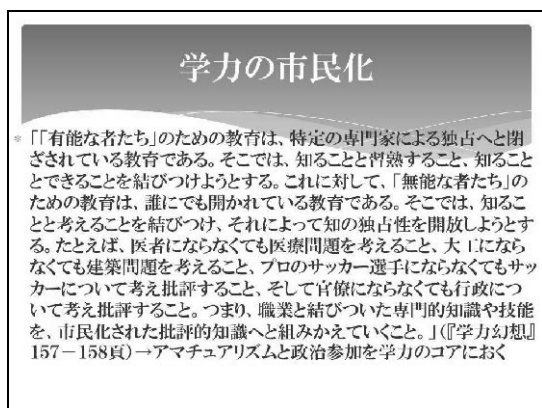


図9

そうした学びを、私は学力の市民化と考えています(図9)。これは、特定の専門家による独占へと閉ざされている「有能な者たち」のための教育に対して、知ることと考えることを結び付けることで知の独占性を開放しようとする「無能な者たち」のための教育です。例えば、医者にならなくても医療問題を考えられますし、大工にならなくても建築問題を考えられます。プロのサッカー選手にならなくても、サッカーについて考え、批評することはできます。そして、官僚にならなくても、行政について考え、発言し、批評することができます。つまり、職業と結び付いた専門的な知識や技能を市民化された批評的な知へと組み替えていくということです。

後ほど藤村先生からリテラシーについて、「できるリテラシー」から「分かるリテラシー」へと変わる局面があるということについてお話いただけるとと思いますが、そのように関わってくるのが問われていると思います。

2-5.「あまちゃん」にみるアマチュアリズム

今年度、話題になった二つの作品から例を挙げたいと思います。一つは、今年度上半期に放映されたNHK連続テレビ小説「あまちゃん」です。批評家の中森明夫さんや宇野常寛さん、それから社会学者の大澤真幸さんなどによって既に議論がなされていますが、「あまちゃん」は、高度成長期以降の日本社会の構造転換の中で見られる新しい東京と地方の関係、家族や学校のありよう、そして思春期の人間

が大人になっていく様子を非常に深く掘り下げた作品になっています。

学校でいじめられて引きこもっていた東京の高校生、天野アキが、町おこしの主人公として活躍していくという話ですが、その中でアキは「成長しないとイケないと言われる。でも、成長しなければ駄目なのかと思う。人間は放っておいても成長する。むしろ変わりたくない。あまちゃんだと言われるかもしれないけれど、それでもいい。プロちゃんにはなれないし、なりたくない」と言っています。これは作者の宮藤官九郎さんが、「大人にならなくてもいいけれども、変わらないことで大人になれることもある」ということを、「アマチュアリズム」という言葉に引きつけて言わせている場面で、アマチュアリズムの考え方が典型的に示されています。

2-6.ハンナ・アレントと「考えること」



図10



図 11

もう一つは、現在上映されている「ハンナ・アーレント」という映画です(図 10-図 11)。戦前、ユダヤ人としてナチスから迫害を受け、戦後はアメリカで活躍したアレントという人の生き方が紹介されています。アレントはハイデggerの弟子でもあります。彼女がテーマにしたのもまさに「考えること」です。アレントは「考えることで、人間は強くなる」という信念の下、世間から厳しい批判を浴びながらも、アイヒマンの「悪の凡庸さ」を主張することで、自分の考えを世間に主張し続けました。日本人は空気を読んだり、人に合わせたりすることが得意だといわれますが、むしろ空気を読まずに自分の考えを人前で言うのがアレントの生き方です。この映画も、考えること、考える市民を目指す上で重要な論点になるかと思います。

2-7.大学入試改革論議の動向

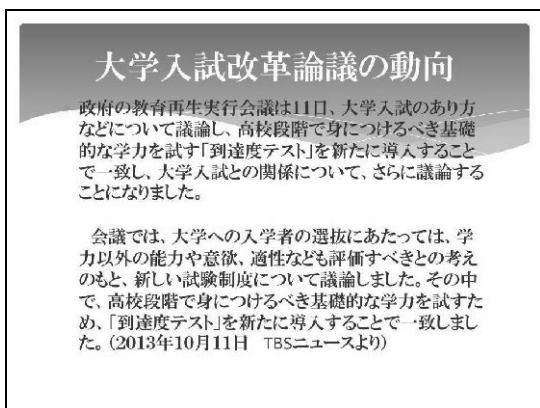


図 12

日本の大学入試制度との関係で、こうしたカリキュラムを導入することの現実性がよく問われるのですが、高度成長期以降、日本の学校教育が提供する学力は、人材選別のためのシグナルとして機能してきました。そのシグナリング機能が壊れてきているため、学力中心の入学選抜の仕方を変えるべきだということで、いろいろな議論が行われているわけです。

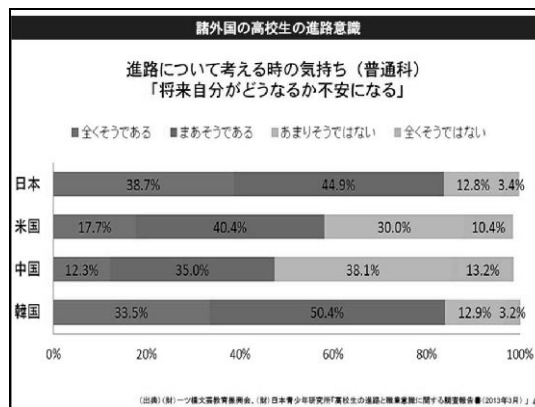


図 13

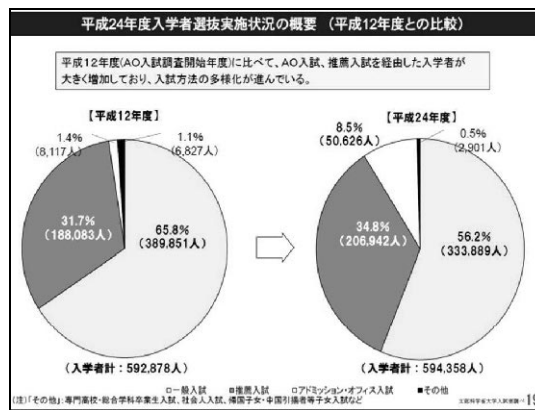


図 14

例えば、センター試験を廃止して新しい試験を行う、あるいはAO入試や推薦入試を増やすということがいわれていますが、その背景には、多くの日本の高校生が将来に対して非常に不安感を持っているという現状認識があります(図 13)。また、東大はこれまでのオーソドックスな入試を続けていますが、他の多くの大学では、AO入試や推薦入試を経由した学生数がここ 10 年で全体の半分に迫ろうとしている

のです(図 14)。恐らく、これが半分を超えるのは時間の問題で、こうした現状そのものを積極的に制度に乗せていこうという提案が進んでいます。

2-8.世界的視野を持った市民的エリート

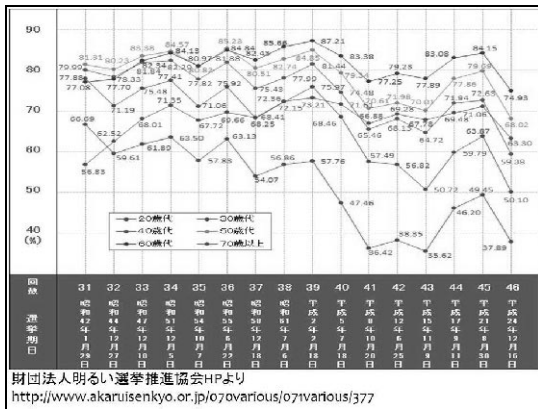


図 15

「世界的視野をもった市民的エリート」

このシステムの大きな特色の一つは、入学前のギャップタームの存在である。ギャップタームにおいて、先端の研究や社会との接点を持つ多様な体験を通じ、大学で学ぶ目的意識を明確化し、動機付けを行うこと(併せて、偏差値重視の価値観をリセットし、教わる姿勢から学ぶ姿勢に転換すること)、さらに、入学後の海外留学等に挑戦する素地をつくることは、大きな意義を持つと考えられる。こうした意義は、多くの高等学校卒業生にとって普遍性を持つものであり、また、レイト・スペシャリゼーションとともにアーリー・エクスポージャーを重視する本学の教育理念とも合致するものである。(「将来の入学時期の在り方について—よりグローバルに、よりタフに—」(報告)2012年4月発行、東京大学『学内広報』特集版 21頁)

図 16

現在、20 代の若者の投票率が非常に下がっています(図 15)。東京大学はこうした状況の中で、早い段階から社会問題にさらされること(アーリー・エクスポージャー)を重視しており、2012 年発行の『学内広報』では、「将来の入学時期の在り方について—よりグローバルに、よりタフに—」(報告)において「市民的エリート」という言葉を使って問題提起をしています(図 16)。

総務省「常時啓発事業のあり方等研究会」最終報告書(2011. 12.)

- 社会に参加し、自ら考え、自ら判断する主権者を口指して～新たなステージ「主権者教育」へ 2011年12月 常時啓発事業のあり方等研究会(総務省)
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/keihatsu/index.html
- 「政府は、「新しい公共」の推進に取り組んでいるところである。「新しい公共」とは、市民、企業、政府等がそれぞれの役割をもって当事者として参加、協働し、支え合いと活気のある社会をつくることである。そのためには、何よりもそれを担い得る市民を育てることが重要である。これからの常時啓発は、まさにそうした市民を育てること、言葉を変えて言えばシティズンシップ教育の一翼を担うものでなければならない。」(p.7)若者の政治的無関心への対応

図 17

「常時啓発事業のあり方等研究会」最終報告書

社会に参加し、自ら考え、自ら判断する主権者を口指して
～新たなステージ「主権者教育」へ～

<現代に求められる新しい主権者像>
国や社会の問題を自分の問題として捉え、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者

キーワード
①社会参加の促進 …… 社会参加意欲が低い中では政治意識の高揚は望めない
②政治的リテラシーの向上 …… 情報を収集し、的確に読み解き、考察し、判断する訓練が必要(政治的判断能力)

<これからの常時啓発>
シティズンシップ教育の一翼を担う新たなステージ「主権者教育」へ

- 若者から高齢者まで、常に学び続ける主権者を育てる
→ シティズンシップ教育の中心をなすのは、市民と政治、社会との関わりを深めること。常日頃から政治や社会の問題を考え、学習、体験を積み重ねることによってはじめて質の高い投票行動に結びつく。
→ 社会の諸活動に参加し体験することで、社会の一員としての自覚を促し、その中で、数多くの政治的・社会的課題に対して的確に意思決定できる資質を育てる。
- 将来を担う子どもたちにも、早い段階から、社会の一員、主権者という自覚を持たせる
→ 子どもたちの政治意識の醸成は各課の共通課題。諸外国の事例も参考に、学校教育と連帯し、参加・体験型の学習を充実させることが必要。
→ 最終的には、次期学習指導要領において政治教育をさらに充実させ、学校教育のカリキュラムにしっかりと政治教育を位置づけることが必要。

図 18

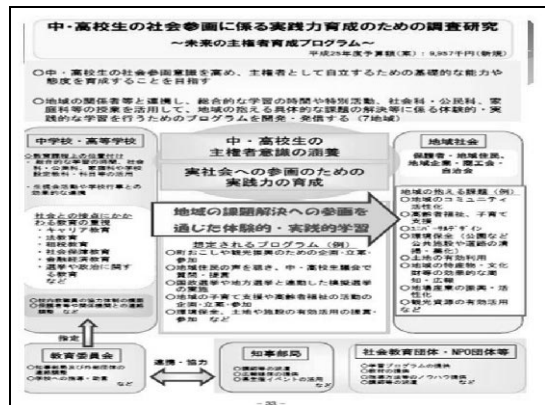


図 19

総務省も若者の投票率の結果をにらみ、政治的なリテラシーの向上を学校教育でももっと積極的に図るべきだと提案しています(図 17-図 18)。これを受

けて文部科学省も、主権者を育成するためのカリキュラムを作らなければいけないと言っています(図19)。



図20

今年3月に日本シテズンシップ教育フォーラム(J-CEF)という団体がつくられて、いろいろな学校の実践をネットワークする場を創出しています(図20)。

2-9.シテズンシップ教育の政策化

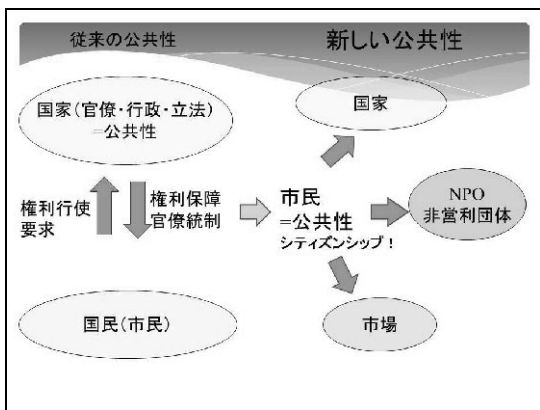


図21

従来、市民は行政の下にいるものでした。しかし、今では市民が中心となって社会を担っていく「新しい公共性」がいられています(図21)。

シテズンシップ教育の政策化

2003年3月20日：新しい「公共」を創造し、21世紀の国家・社会の形成に主体的に参画する日本人の育成（中央教育審議会「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」）→現行教育基本法2条3号「公共の精神」につながる

- 2010年1月26日：「新しい公共」円卓会議＝「新しい公共」とは、人を支えるという役割を、「官」と言われる人たちだけが担うのではなく、教育や子育て、街づくり、防犯や防災、医療や福祉などに地域でかかわっておられる方々一人ひとりにも参加していただき、それを社会全体として応援しようという新しい価値観です。（第173回国会における所信表明演説）
- 政府レベルではじめて、「シテズンシップ教育の推進」を唱える動きが活発化し、その中で「政治的教養」が中心に位置づけられている（2010年7月内閣府「子ども・若者ビジョン」）。
- 2012年12月に成立した自公政権では、「公共心」の教育や新科目「公共」の設置が議論されている。

図22

シテズンシップ教育の政策化も紆余曲折を経ています。例えば2010年に民主党政権が提案した「子ども・若者ビジョン」では「政治的教養」が中心に据えられていますが、自公政権になってからは「公共性」の教育や新科目「公共」の設置が議論されています。政権交代はありましたが、公共性をカリキュラムの中心に据えることについては、かなり共有され、いろいろな立場から議論されています。

3.カリキュラムの提案へ向けて

シテズンシップ教育をカリキュラム化する二つの方向

- * 1 領域化(教科化)する
 - * (1)総合、道徳、特活を軸に(品川型)
 - * (2)社会科(お茶大附属「市民」)を軸に
- * 2 領域横断的に
 - * 神奈川県「シテズンシップ」教育 神奈川県政治参加教育「総合的な学習の時間」と「政治経済」各教科のネットワーク化
 - * 文科省の今年度概算要求案(前掲)
- * 3 上記の1と2をクロスさせつつ、「政治的リテラシー」(アマチュアリズムと政治参加の両方の契機を含む)を、コアカリキュラムの中心におく、という提案をしたい。

図23

シテズンシップ教育のカリキュラム化には二つの方向性があります(図23)。一つは、既存の教科を横断するという方向性です。各教科に市民的な資質の養成につながるものが含まれているので、それをクロスさせていくような方法が必要だと思います。神奈川県教育委員会は「シテズンシップ」教育の研究校

に県立湘南台高校を指定し、総合学習を一つのプラットフォーム的な時間にして、そこを中心に各教科のネットワーク化を図っています。

もう一つは、もっと積極的に領域化、教科化していくという方向性で、お茶の水女子大学附属小学校は「市民」という教科(学習領域)を設け、これを軸にシティズンシップ教育を行っています。

私は、さらにこの二つの方向性をクロスさせながら「政治的リテラシー」(アマチュアリズムと政治参加の両方の契機を含む)をコアカリキュラムの中心に置くことを提案したいと思います。特に中等教育段階のコアカリキュラムとして、ある種の政治的リテラシーをコアにしたシティズンシップの時間を置くということが、一つの提案としてできるのではないかと考えています。

課題が挙げられます(図 24、25)。学校教育高度化センターの院生プロジェクトでも課題にしているグループがあるので、議論が深まっていけばと思っています。

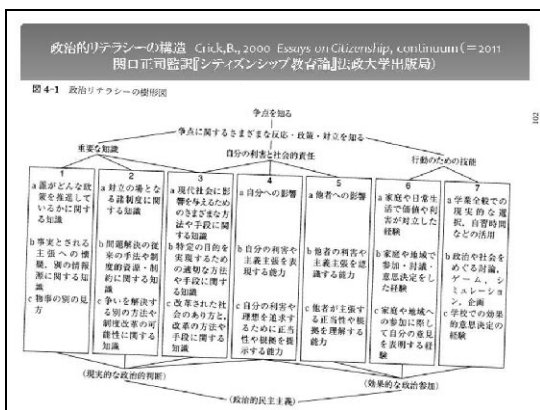


図 24

論争的課題をいかにして教育するか
(クリック・レポート)

- ＊「中立的なチェアマンアプローチ(Neutral Chairman approach)
- ＊「バランスをとるアプローチ」(Balanced approach)
- ＊「明示的に自分の意見を言うアプローチ」(Stated Commitment approach)

＊この3つのアプローチのいずれか一つに偏してはならず、これらを効果的に組み合わせることによって、論争的課題を扱うことが可能。

図 25

政治的リテラシーの中心的な課題として、論争的

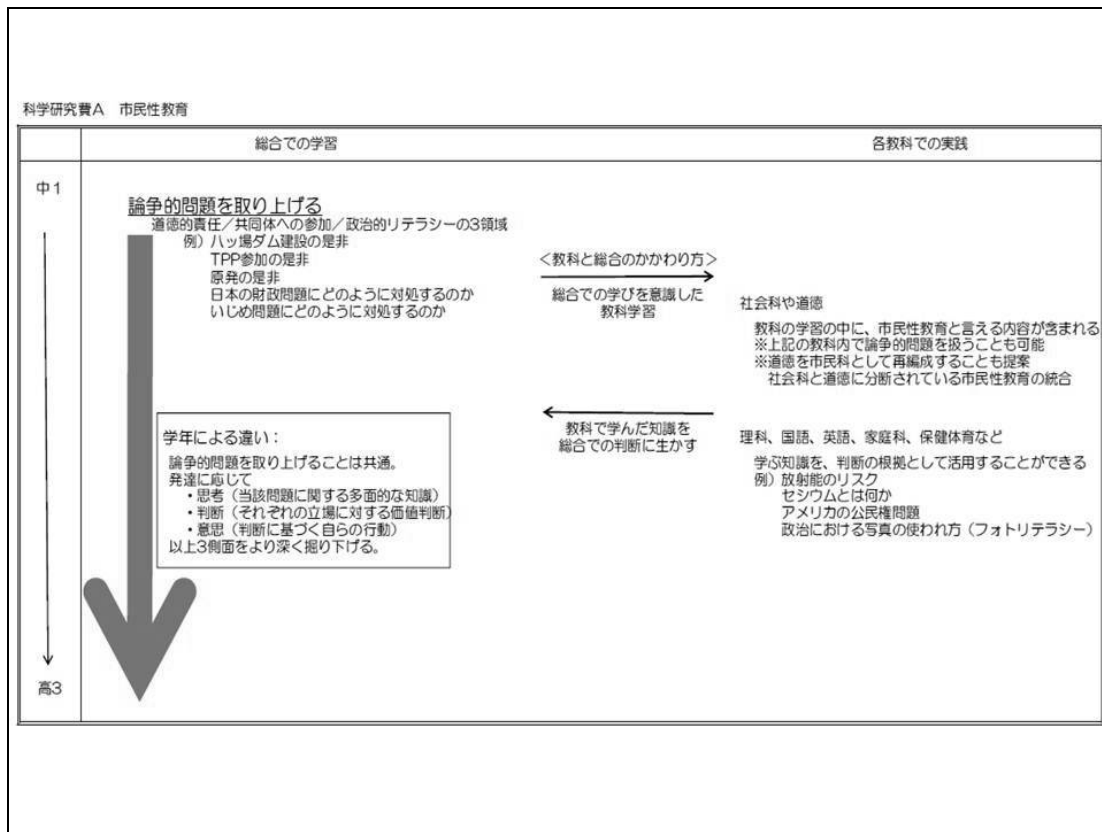


図 26

最後に、社会参加の市民性教育に関して私が提案したいカリキュラムをご紹介します(図 26)。テーマは、大人の社会でもまだ答えの出していない論争的問題を考えていくことです。実際に、お茶の水大学附属小学校では、5年生の「市民」の授業でハッ場ダム建設の是非について扱っていますし、東大附属中等教育学校でも原発の是非をめぐる問題を取り上げたり、消費税の簡易課税システムの導入は公平か、不公平か、それは中小企業の保護につながるのかということについて、東京都の議員や税理士を招いて一緒に議論したりしています。そういう形で授業実践と具体的な研究を進めています。

恐らく他の学校でも、このようなタイプの授業は増えてきていると思います。それをカリキュラムにしていくことを提案して、私からの話を終わらせていただきます。